

研究のトピックス

青谷上寺地遺跡から出土した弥生時代人骨 一概報一

鳥取大学医学部解剖学第二講座 (主任 井上 貴央教授)

井上貴央, 松本充香, 海藤俊行

Human skeletons of the Yayoi era  
from the Aoya-Kamijichi site

Takao INOUÉ, Michika MATSUMOTO, Toshiyuki KAIDOH

*Second Department of Anatomy, Faculty of Medicine,  
Tottori University, Yonago 683-8503, Japan*

ABSTRACT

Lots of human skeletons, which contain at least 65 human cadavers, were discovered in the shallow groove of the Aoya-Kamijichi site in Tottori Prefecture. More than 5000 human bones were scattered without ordered arrangement in the groove. The vessels found in the groove indicated that the skeletons belong to the late period of the Yayoi age (ca. 180 A.D.). Bone injuries due to the metal blades were found in at least 10 cadavers. Since the edges of the wounds were clear without significant osteogenesis, it is speculated that the people were killed instantly. Two cases of spinal caries were also found. One was composed of 3rd to 7th vertebrae, and the other of 7th to 11th vertebrae. Both cases showed osteolytic and chronic inflammatory lesions, forming distinct kyphosis.

(Accepted on December 15, 2000)

**Key words :** human bones, Yayoi era, injury, spinal caries

青谷上寺地遺跡は鳥取県気高郡青谷町青谷に位置し、鳥取県教育文化財団によって調査が進められている。この遺跡は弥生時代を中心とする集落遺跡で、微高地とその東西に広がる低湿地から、土坑群、矢板列や護岸施設に伴う溝などが確認されている。出土遺物は土器のほか、鑄造鉄斧、鍛造鉄斧、鏝などの鉄器、銅鐸、青銅鏡、銅鏃などの青銅器、高坏をはじめとする容器類、農具、工具などの木器、漁具、装身具のほか、多数のト骨を含む骨角器、石斧、農具、漁具、管玉製作に係

る石器など多種多彩な遺物が見つまっている。

この遺跡の県道調査区8区の西側寄りの地点で、微高地と低湿地を区画する溝(幅約8 m, 深さ約0.8 m, 長さ68 m以上)の中から5000点を超える人骨が検出された。伴出した土器の年代から推定して、人骨は弥生時代後期後半(2世紀後半)のものと考えられる。これらの人骨は土壙や石棺などの施設に埋葬されたものではなく、無秩序に散らばり、様々な骨が折り重なるようにして発見された。この人骨には、少なくとも65体の人骨が

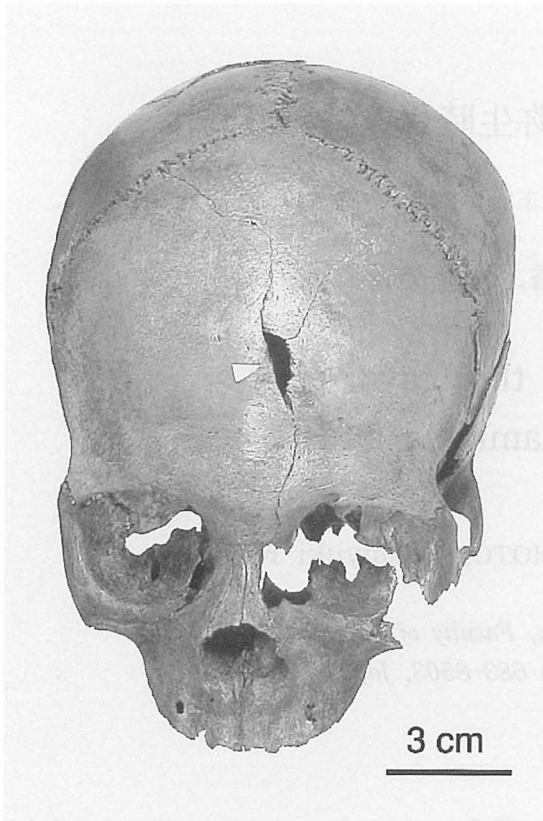


図1 若年女性の前頭部の紡錘形の刺創痕  
亀裂骨折を伴う

含まれていた。性別では男性骨が女性骨よりも多かった。年齢構成は、壮年（20～40才）のものが最も多く、ついで10才代の子供の骨が多かった。今回見つかった人骨はその場に埋葬されたものではなく、溝の中から全身骨格が散乱した状態で出土している。これまで国内で出土した弥生人骨の大部分は、埋葬施設に伴うものであり、今回の出土状況は極めて異例である。

人骨を精査した結果、135点の人骨に殺傷痕が（少なくとも10体分）認められ、かなりの割合で骨にまで達する傷を受けていたことが判明した（図1-3）。また、これらの殺傷痕にはほとんど治癒傾向が認められず、即死状態であったと考えられる。殺傷痕のある人骨のなかには、骨盤に青銅製の武器が突き刺さったままのものが2例、金属器が突き刺さったままの上腕骨が1例あり、その他の殺傷痕も戦いの結果生じたものと思われる。殺傷痕の認められた人骨の点数から見ると、これまで報告された弥生時代の損傷人骨の数をはるかにしのいでいる。

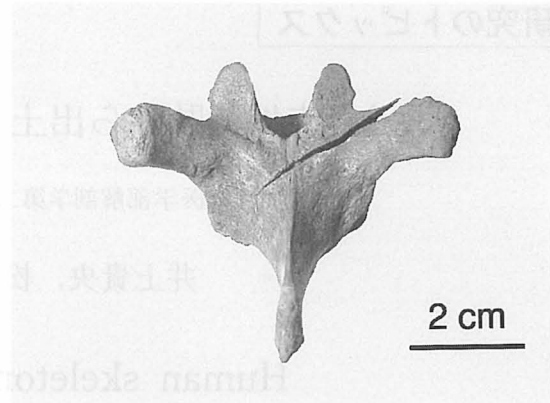


図2 右横突起から椎弓にかけての割創痕

また、これらの人骨の中には脊椎カリエスの症例が2例含まれていた。第1例は成人男性と推定される資料で、第3～7胸椎にかけて（図4）、第2例は成人（性別は不詳）の第7～11胸椎にかけての資料である。いずれも個々の椎体が識別不可能なほどに変形癒合し、脊柱は著しく後弯し、亀背を形成している。

結核は結核菌の感染（空気感染）によって引き起こされる疾患であり、肺に病巣を形成するが、その後、結核菌が血行性に全身に散布され、肺以外の臓器（リンパ節、骨、関節、腎臓、脳など）に病巣を作ることがある。結核菌にはヒト型、ウシ型、トリ型などがあるが、ウシ型はウシに結核を感染させるばかりではなく、ヒトにも感染する。骨・関節における肺外結核のうち、最もよく見られるのは椎骨で、ここに結核菌が運ばれ菌が増殖すると、骨組織を破壊し、空洞が生じる。やがて椎骨がつぶれて脊柱が屈曲し、脊椎カリエスとなる。症状が進むと脊柱の一部が丸く曲がり、亀背を形成する。

結核の古い症例をあげると、エジプトの紀元前1000年頃の第21王朝アモンの神官のミイラに亀背が認められ、中国の馬王堆古墳（紀元前193～186年頃の漢朝）から発見されたミイラの肺に結核病変が見つかった。

日本における結核のルーツを考えてみると、縄文時代には保存良好の骨が多数見つかったが、結核を患った人骨は見つからないので結核は存在しなかったと考えられている。これまで本邦における最古の結核例は古墳時代（6～7世紀）の人骨で確認された3例だけである。これまで結核は弥生～古墳時代に日本に移入されたので



図3 腸骨に刺さった金属器

壮年男性の左腸骨の後外側（左殿部の後外側）から斜め方向に青銅製の金属器が刺し込まれ、仙腸関節の後部に達している

はないかと考えられてきた。今回の発見は、これまでの発見を約400年さかのぼる、わが国最古の古病理学的症例である。

古墳時代にウシが増加するので、結核はウシに伴って大陸からもたらされたものとする見解がある。しかし、今回発見された青谷上寺地遺跡からは多量の獣骨が検出されているにもかかわらず、ウシの骨は1点も発見されていない。したがって、今回発見された脊椎カリエスの症例はウシ型結核菌によるものではなく、ヒト型結核菌によるものとするのが妥当である。今回発見された脊椎カリエスの症例は、大陸から稲作、鉄などの文化とともに結核の伝搬を示唆するものであり、日本に

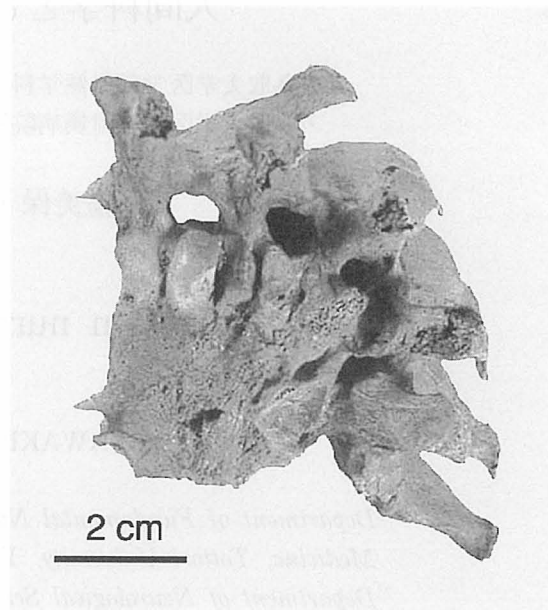


図4 結核による脊椎カリエス（亀背形成を示す症例）

成人男性（推定）の第3胸椎から第7胸椎

における結核のルーツを考える上で貴重な発見といえる。

弥生後期の人骨は、全国的に見ても発掘例が少ない。これまでも殺傷痕の認められる弥生人骨が報告されているが、ほとんどが弥生中期までのものである。今回発見された弥生後期の人骨は、戦乱の時代であった弥生時代から古墳時代へ移行する前夜の様相を知る上でも考古学的に貴重な資料となるであろう。

#### 参考文献

- 1) 鈴木隆雄. (1998) 骨から見た日本人. 講談社, 東京.
- 2) 小片丘彦. (1978) 日本古人骨の疾患と損傷. 小片保編, 人類学講座5, pp. 189-228. 雄山閣, 東京.